

保育実習で学ぶ子どもの生命の保持

—実習中の体験内容・園児の体調不良・ヒヤリハットからの検討—

小川 真由子¹、杉山 佳菜子¹、榊原 尉津子²

要旨

子どもの生命を保持するための授業内容の構築の一助とすることを目的に、保育者を目指す学生を対象に、保育実習で体験した内容と経験した園児の体調不良、ヒヤリハットについて検討した。実習中に体験した内容と経験した園児の体調不良に関して、昨年の調査と比較して2週間の実習経験の中では偏りはないことが見受けられ、病気についての知識や症状・ケガへの対応についてしっかり大学の授業において教授する必要性が示唆された。

また、ヒヤリハットに関して93.9%の学生が経験しており、様々な場面で事故につながりかねない体験から、保育現場における危機管理や安全対策についての学びが得られていることが明らかとなった。保育者を含め、子どもを養育する大人一人ひとりが危機管理の意識を持ち、事故の現状やヒヤリハットの状況を分析し、事故予防に心がける必要がある。保育者として子どもの生命を保持するために必要な知識と技術を身につけさせることは、養成機関に課せられる重要な課題の一つであると考えられる。学内で行われる講義はもちろんのこと、外部での実習の経験を活かした有益な学習効果が得られるような授業内容の構築について、今後も検討を重ねていきたいと考える。

キーワード

保育実習, 生命保持, 体験内容, 園児の体調不良, ヒヤリハット

1. はじめに

保育所保育指針第1章総則では、「保育における養護とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とするものである」¹⁾とその理念を記している。子どもの命を預かることは保育者として重大な責務であり、子どもの健康を守るための知識や、事故防止や危機管理を含む安全対策に関する知識に関しては保育者をめざす学生にとってはその資質に大きく影響する重要な内容であると考えられる。生命の保持の内容は、「一人一人のこどもの平常の健康状態や発育及び発達状態を的確に把握し、異常を感じる場合は、速やかに適切に対応する」²⁾と記載されている。保育所保育指針の第3章健康及び安

¹ こども教育学部こども教育学科

² 高田短期大学子ども学科

全の「1子どもの健康支援」では、【(1)子どもの健康状態並びに発育及び発達状態の把握】、【(2)健康増進】、【(3)疾病等への対応】において保育者には健康状態や疾病等の把握について言及されており、「子どもの疾病等の事態に備え、医務室等の環境を整え、救急用の薬品、材料等を適切な管理の下に常備し、全職員が対応できるようにしておくこと」と明記されている。しかし、筆者ら³⁾が行った調査では、保育者が子どもの生命の保持を行うための観察に関連した研究の報告は、CiNii Articlesにおいて検索されなかった。

そこで、筆者ら⁴⁾が昨年行った調査では、健康と安全を学ぶ科目として「子どもの保健Ⅰ・Ⅱ」、「子どもの保健演習」の授業内容の検討と教授方法について少なくとも実習において経験した内容を優先して事前の授業内容に取り入れ、知識や技術の修得をしておく必要があることが分かった。しかし、2018年度に子どもを保育する施設である幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の要領や指針が同時改訂（改定）し施行された。同時に、保育者の養成基準についても見直しがなされ平成29年12月4日に保育士養成課程等検討会にて、「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」の報告書⁵⁾が出され、平成31年度より適用予定となっている。その中でも子どもの生命の保持に関わる内容の科目は、従来は「子どもの保健Ⅰ（講義4単位）」と「子どもの保健Ⅱ（演習1単位）」であったが、見直しにより「子どもの保健（講義2単位）」と「子どもの健康と安全（演習1単位）」と変更されたため、講義や演習の方法や内容の見直しが必要となる。それに伴い、昨年に引き続き調査を行うことで、変更がなされた科目に対する授業構築への示唆を得られると考える。

2. 目的

保育者を目指す学生を対象に、保育実習で体験した内容と経験した園児の体調不良、ヒヤリハットについて検討し、子どもの生命を保持するための授業内容の構築の一助とすることを目的とする。

3. 方法

(1) 調査対象者

保育実習Ⅱを終了した保育士養成課程の短期大学部2年生33名(男子2名、女子31名)。「保育実習Ⅰ（保育所・施設）」と「幼稚園教育実習Ⅰ」の3回の実習を経験している。

(2) 調査時期

2018年7月。

(3) 質問項目

1) 実習中での体験について

抱っこ、おんぶ、衣服の着脱、紙おむつ交換、布おむつ交換、身体計測、検温、視力検査、聴力検査、歯科検診、内科検診、耳鼻科検診、歯みがき、沐浴、座浴、その他の16

項目の選択肢をあげ、実習中に経験した内容について複数選択回答を求めた。

2) 実習中に経験した園児の体調不良について

発熱、咳、嘔吐、腹痛、下痢、けいれん、発疹、ケガ（すり傷など）、打撲、骨折・脱臼・捻挫、やけど、鼻血、熱中症、誤飲、その他の15項目の選択肢をあげ、実習中に経験した園児の体調不良の種類について複数選択回答を求めた。

3) 実習中に経験したヒヤリハットについて

実習中に経験した園児のケガや事故、ヒヤリハットについて、①保育室、②廊下・テラス、③園庭、④その他の場面別に自由記述で回答を求めた。

(4) 分析方法

単純統計にはMicrosoft® Excel®2013を使用し、自由記述に関しては、記述内容をテキストマイニングの分析ソフトであるKHCoder 3AS 12b(ver. 3.0.0.0)⁶⁾を用いて頻出語、共起ネットワークの計量的分析を行った。

(5) 倫理的配慮

質問紙への回答は自由であり、答えたくない質問には未記入でもよいこと、個人が特定されないように統計的に処理すること、得られたデータは研究以外の目的には使用しないこと、実習の成績には影響しないことなどを説明し、質問紙の提出を持って調査への協力の同意が得られたものとした。

4. 結果

(1) 実習中での体験について

16項目の選択肢のうち、多かった順に図1に示す。最も多かったのは抱っこ27名(81.8%)で、次いで衣服の着脱23名(69.7%)、紙おむつ交換21名(63.6%)であった。その他は1名(3%)で排泄の介助であった。一方、視力検査、聴力検査、耳鼻科検診、座浴の4項目に関しては、体験した学生はいなかった。

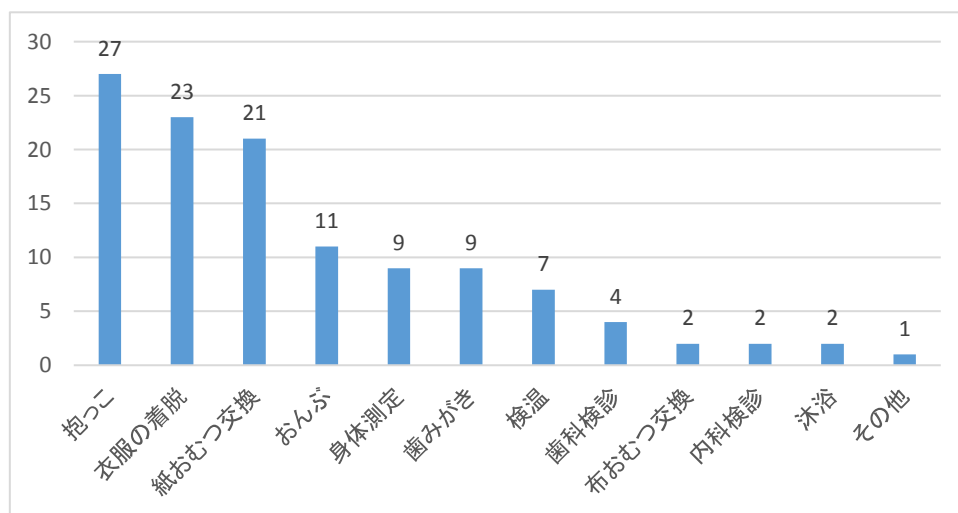


図1 実習中の体験

（２）実習中に経験した園児の体調不良について

15項目の選択肢のうち、多かった順に図2に示す。最も多かったのは発熱15名(45.5%)で、次いでケガ(すり傷など)10名(30.3%)、咳9名(27.3%)であった。一方、けいれん、骨折・脱臼・捻挫、熱中症、誤飲、その他の5項目に関しては、経験した学生はいなかった。

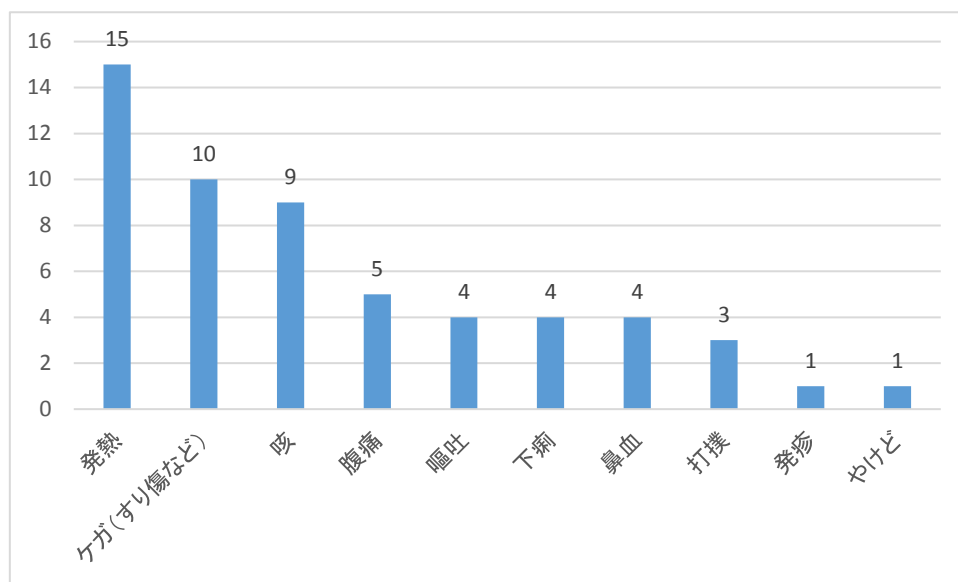


図2 実習中に体験した園児の体調不良

（３）実習中に経験したヒヤリハットについて

実習中に経験したヒヤリハットについての記入した学生は2名を除く31名(93.9%)であった。①保育室での記入が25名(75.8%)、②廊下・テラスでの記入が15名(45.5%)、③園庭での記入が24名(72.7%)、④その他の記入は4名(12.1%)であった。

1) 頻出語

表1 ヒヤリハットの記述内容での頻出語

名詞	回数	動詞	回数
子ども	18	走る	11
すべり台	6	ぶつかる	11
同士	6	落ちる	5
ブランコ	3	こける	5
階段	3	滑る	3
取り合い	3	走り回る	3
鉄棒	3	転ぶ	3
乳児	3	登る	3
クワガタ	2	入る	3
広め	2	飲む	2
段差	2	かみつく	2
年長	2	上る	2
友達	2	打つ	2
遊具	2	転落	2

学生から得られた31件の自由記述データを分析対象とした。KH Coder を用いて前処理

を実行し、文章の単純集計を行った結果、65の段落と65の文が確認された。また、総抽出語数（分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数）は666、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は195であった。さらに、助詞や助動詞などのような文章にでもあらわれる一般的な語が除外され、分析に使用される語として280語（異なり語数147）が抽出された。これらの頻出語のうち、名詞、動詞別に複数回出現したものを表1に示す。名詞に関して、すべり台、ブランコ、階段、鉄棒、遊具などの場所があげられていた。動詞に関して、走る、ぶつかる、落ちる、こける、滑る、走り回る、転ぶ、登る、入る、飲む、かみつく、上る、打つ、転落などがあげられていた。

2) 共起ネットワーク

KH Coderの「共起ネットワーク」のコマンドを用い、ヒヤリハットの自由記述それぞれの中で、出現パターンの似通った語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを描いた（図3）。なお、分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を2に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を60に設定した。

図3では、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。また、語（node）の色分けは「媒介中心性」（それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す）によるものであり、白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示している。

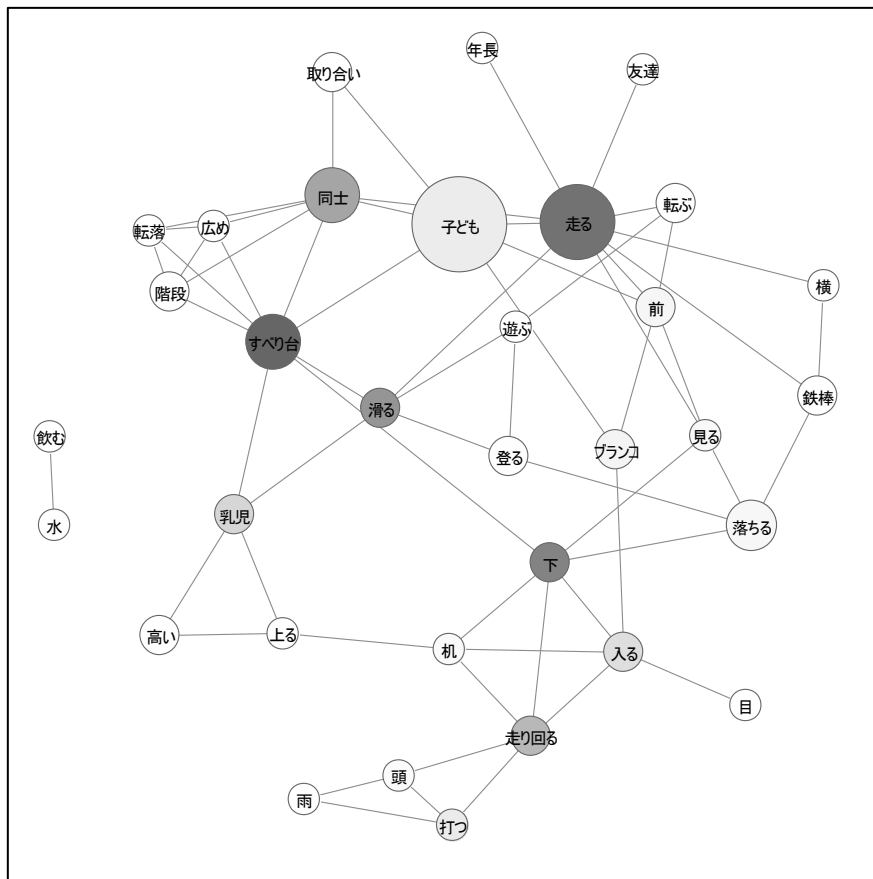


図3 ヒヤリハット：抽出語の共起ネットワーク

媒介中心性が高かったのは、色の濃かった順にすべり台、走る、滑る、下、同土、走り回る、乳児、入る、子ども、ブランコ、打つであった。（下線を記しているのは、図3の中にあらわれている語を示す）最も中心性の高かったすべり台に関して6の文が抽出され、「すべり台で側面にぶら下がる」「すべり台の下で子どもがいるのに滑り出す」「乳児が一人ですべり台を滑ろうとしていた」「すべり台の広めの階段から転落」「すべり台の手すりを持っていたがこけそうになっていた」という記述内容であった。

3) クラスタ分析

「階層的クラスタ」コマンドで、集計単位：H5、最小出現数：2に設定し、クラスタ分析を行った。クラスタ化の方法は、クラスタリング法の中で比較的多く用いられている Ward 法を採用した。また、対象単語の数や分析結果の解釈の合理性から距離は Jaccard を採用し、クラスタ数は6に分類された。分析結果で得られた36語、6クラスタからなるデンドログラムを図4に示す。

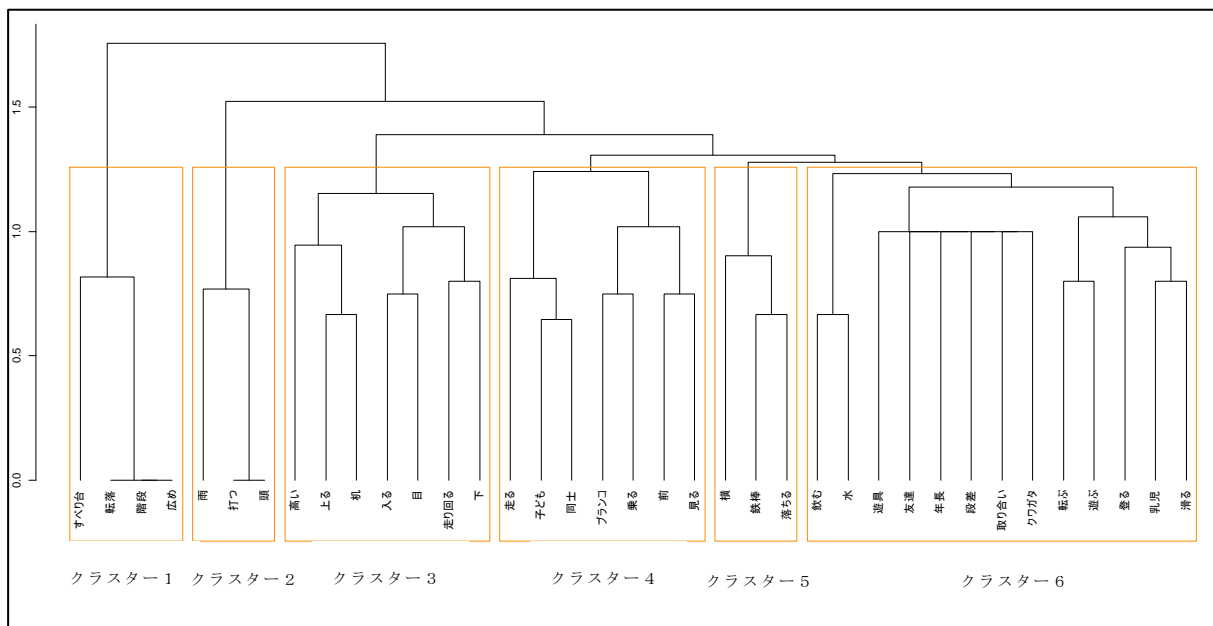


図4 ヒヤリハット：クラスタ分析

クラスタ1は、すべり台、転落、階段、広めの4語で、「すべり台の下で子どもがいるのに滑り出す」「すべり台の広めの階段から転落」といった『すべり台』に関する語が集まった。クラスタ2は雨、打つ、頭の3語で、「雨が降って子どもがこけそうになった」「雨の日にすべってこけて頭を打った」といった『雨の日』に関する語が集まった。クラスタ3は高い、上る、机、乳児、高い、入る、目、走り回る、下の8語で、「机の下に入っていったり上ろうとしていた」「年長さんが乳児を抱っこして落としてしまった」など『保育室』に関する語が集まった。クラスタ4は登る、滑る、遊ぶの3語で、「ブロックに登って遊び、足を滑らせてしりもちをついた」「フェンスに登っておもちゃを取ろうとして落ちそうになる」といった『高いところ』に関する語が集まった。クラスタ5は

横、鉄棒、落ちるの3語で、「鉄棒から落ちて唇を切る」「鉄棒をしている子どもの横から縄跳びをしながら走ってくる子どもがいた」といった『鉄棒』に関する語が集まった。クラスター6は飲む、水、走る、子ども、同士、転ぶ、ブランコ、前、見る、遊具、友達、年長、段差、取り合い、クワガタの15語で、「雨水を飲もうとしていた」「ゆれているブランコに入っていこうとした」「走っていて子ども同士がぶつかり転んだ」といった『外遊び』に関する語が集まった。

5. 考察

実習中の体験について、昨年筆者ら⁴⁾が行った調査結果と同様上位5位までは抱っこ、衣服の着脱、紙おむつ交換、おんぶ、歯みがきの順であった。また、数は多くないが、布おむつ交換や内科検診、歯科検診の体験も昨年の調査と同様に体験していたことが明らかとなった。一方、沐浴については、昨年は体験した学生はいなかったが、今回は1名であった。また、実習中に経験した園児の体調不良に関して、昨年はケガ(すり傷など)が最も多かったが、今回は発熱であった。これに伴って実習中の検温の体験する機会が増えたのではないかと考える。しかし、図2からは外科的・内科的要素に関して、2週間の実習経験の中では偏りはないことが見受けられ、病気についての知識や症状・ケガへの対応について、しっかり大学の授業において教授する必要性が示唆された。

また、ヒヤリハットに関して93.9%の学生が経験しており、その自由記述からは様々な知見が得られた。厚生労働省による「平成29年教育・保育施設等における事故報告集計」⁷⁾によると、教育・保育施設等で発生した死亡事故や治療に要する期間が30日以上を負傷や疾病を伴う重篤な事故等で、平成29年1月1日から平成29年12月31日の期間内に報告のあった事故の報告件数は1,242件にのぼる。負傷等の報告は1,234件あり、そのうち1,030件(83%)が骨折によるもので、死亡の報告は8件であった。事故の発生場所は施設内が1,092件(88%)であり、そのうち592件(54%)は施設内の室外で起きていた。負傷等の報告は、5歳児、4歳児の順に多かった。場所においては、施設内より施設外の方が多く、室内より室外の方が多という結果が報告されている。今回の調査では骨折・脱臼・捻挫に関しての体験の報告はなかったが、様々な場面で事故につながりかねないヒヤリハットの体験から、保育現場における危機管理や安全対策についての学びが得られたものと推察される。自由記述のクラスター分析からは、『すべり台』『雨の日』『保育室』『高いところ』『鉄棒』『外遊び』といった6つのクラスターのキーワードが得られた。どれも危険を予測し、安全対策すべきことの多いキーワードであることは容易に想像できる。田中らの報告⁸⁾では、昭和35年以降、1歳以上のどの年齢においても不慮の事故が死亡の上位にあり毎年同じような事故が発生していることから、命を落とさずとも重大な障害を残す子どもも多いと述べている。このことは重大な事故は氷山の一角にすぎず、ヒヤッとする程度のことは数十万倍も起こっていると推察し、それは数十年にわたり子どもを取

り巻く環境の安全性がほとんど改善されていないことを示しており、保育者を含め、子どもを養育する大人一人ひとりが危機管理の意識を持ち、事故の現状やヒヤリハットの状況を分析し、事故予防に心がける必要がある。

前述したように、保育者養成課程等の見直しに伴い、子どもの生命の保持に関わる内容の科目は、講義や演習の方法や内容の見直しが必要⁹⁾となる。見直し後は子どもの体調不良に関する内容や事故防止や危機管理に関する安全対策などの内容が取り扱われるのは、「子どもの保健」においては、3.子どもの心身の健康状態とその把握 の一部として(1)健康状態の観察(2)心身の不調等の早期発見、4.子どもの疾病の予防及び適切な対応として(1)主な疾病の特徴(2)子どもの疾病の予防と適切な対応、「子どもの健康と安全」においては、1.保健的観点を踏まえた保育環境及び援助 として(1)子どもの健康と保育の環境(2)子どもの保健に関する個別的対応と集団全体の健康及び安全の管理、2.保育における健康及び安全の管理 として(1)衛生管理(2)事故防止及び安全対策(3)危機管理(4)災害への備え、3.子どもの体調不良等に対する適切な対応として(1)体調不良や傷害が発生した場合の対応(2)応急処置(3)救急処置及び救急蘇生法、6.健康及び安全の管理の実施体制 として(1)職員間の連携・協働と組織的取組(2)保育における保健活動の計画及び評価(3)母子保健・地域保健における自治体との連携(4)課程、専門機関、地域の関係機関等との連携などが挙げられる。保育者として子どもの生命の保持に必要な知識と技術を身につけさせることは、養成機関に課せられる重要な課題の一つであると考えられる。学内で行われる講義はもちろんのこと、外部での実習の経験を活かした有益な学習効果が得られるような授業内容の構築について、今後も検討を重ねていきたいと考える。

6. まとめ

保育者を目指す学生にとって、保育実習での経験や学びは養成機関で修得した知識の確認や学習意欲向上の絶好の機会であると考えられる。また、保育実習で体験するであろう内容を講義内容に反映させておくことは学生にとって有益であると考えられる。今後も引き続き調査を重ね、保育者養成課程等の見直しに伴う科目間での取り扱う内容の検討なども行い、望ましい授業構築を目指したい。

引用・参考文献

- 1) 民秋言(2017): 幼稚園教育要領・保育所保育士指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷, 萌文書林
- 2) 厚生労働省告示第117号(2017): 保育所保育指針 平成29年3月31日告示, フレーベル館
- 3) 藤井紀子, 福田博美, 小川真由子他(2018): 保育者による子どもの健康観察の教育

内容一判例からの検討一，金城大学紀要，（印刷中）

- 4) 小川真由子，杉山佳菜子，榊原尉津子（2018）：保育実習の振り返りと自己評価(1)実習経験からみた「こどもの保健Ⅰ・Ⅱ」「こどもの保健演習」の授業内容と教授方法の検討，鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要．人文科学・社会科学編，(1), 159-170.
- 5) 厚生労働省（2018）：平成30年4月1日から保育所保育指針の改正（保育所保育指針解説より）<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf>（最終アクセス2018年9月20日）
- 6) 樋口耕一（2014）：社会調査のための計量テキスト分析，ナカニシヤ出版．
- 7) 厚生労働省（2018）：「平成29年教育・保育施設等における事故報告集計」の公表及び事故防止対策について，
http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/h29-jiko_taisaku.pdf27（最終アクセス2018年9月21日）
- 8) 田中哲郎，石井博子，内山有子（2003）：幼児安全教育プログラムの評価，平成14年度子どもの事故防止と市町村への事故対策支援に関する研究報告書，497
- 9) 全国保育士養成協議会（2017）：保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-3s2.pdf（最終アクセス2018年9月22日）

こども教育学部こども教育学科 ogawam@suzuka-jc.ac.jp

Maintenance of the Life of a Child Learning in Childcare Training

— Examination from Experience-Based Contents, Poor Physical Condition of the Child and the Near Misses —

Mayuko OGAWA, Kanako SUGIYAMA, Itsuko SAKAKIBARA

Abstract

A purpose of this study is the architectural help of class contents to maintain the life of the child and a thing doing. For students to be a childminder, we examined contents and the physical condition defectiveness of the kindergartener who experienced it, the near misses which we experienced in childcare training. In regards to contents and the poor that we experienced during training physical condition of the kindergartener who experienced it, it was a result almost same as an investigation of the last year. In addition, 93.9% of students experienced it about a near miss. Including a childminder, each adult bringing up a child has consciousness of the crisis control and analyzes the situation of the present conditions and the near misses of the accident, and it is necessary to keep it in mind for the accident prevention. It is one of the important problems of the training organization to let you wear knowledge and a technique necessary to maintain the life of the child as a childminder. We would like to repeat the examination in the future so as to use the reseach in training classes. I will be improve class contents.

Keyword

Childcare training, Life maintenance, Experience-based contents,
Poor physical condition of the kindergartener, The near misses